

ち衛分証の段階では悪寒はあり得るということです。ただし、温病であれば悪寒は軽く、悪熱あるいは身熱感も併存します。例えば、背筋は少し寒いけれども胸は熱い、といった訴えです。患者が「寒気がします」と訴えている場合には悪寒の程度と悪熱の有無を必ず問診で確認しましょう。

ステップ2 新感と伏邪の鑑別

傷寒初期の太陽病では狭義の傷寒（寒邪の侵襲）と中風（風邪の侵襲）の鑑別が重要ですが、これは〈重点小括1〉で解説しました。温病の病邪の鑑別の前に、**新感温病か伏邪温病か**を区別します。風温、暑温、湿温、秋燥といった新感温病は新たに温邪の侵襲を肺衛に受け、発熱、微悪寒、悪熱、咳嗽といった証候、つまり衛分証から始まります。これに対し春温と伏暑に代表される伏邪温病は発症時に先立って病邪が潜伏しているため発症時からいきなり気分証すなわち壮熱、身熱口渴、発汗、脈洪大といった証候が現れ、時には営分証すなわち夜間身熱、心煩譫語、紅絳舌、脈細数が現れます。伏邪温病は数カ月の潜伏後に自発する場合と、新感邪気の侵襲が伏邪を誘発して発病する**新感引発**の場合の2つのパターンがあります。新感引発の場合は気分証+衛分証あるいは衛分証+営分証といったように衛分の証候を伴います。ただし、一般臨床現場の温病のケースの多くは新感温病です。

ステップ3 病邪類型の鑑別

温邪にはいくつか種類があり、大きく温熱型と湿熱型に分けることができます。またこれらは季節と密接な関係があります。ただし冷暖房や過食生冷などの現代生活習慣の影響により必ずしも教科書的な季節と一致しないことは念頭におくべきです。

①温熱型

- a. 新感：風温〔春〕、暑温〔夏〕、秋燥〔秋〕、冬温〔冬〕
- b. 伏邪：春温〔春〕

②湿熱型

- a. 新感：湿温〔長夏〕

b. 伏邪：伏暑〔秋、冬〕

以上、〔 〕内は原則的な発症季節。

各類型の特徴は以下の通りです。

1) 風温（〈症例1〉参照）

春季の風熱邪気の侵襲によって手太陰肺経から発症します。病邪が順伝すれば衛→気→営→血、上焦（肺）→中焦（脾胃）→下焦（肝腎）ですが、時に逆伝して上焦（肺）→上焦（心包）に至り邪閉心包となって神昏譫語、昏迷を来します（例、ウイルス性脳炎）。

弁証のポイント

- ・一般に春風が吹く初春や立夏前後の急速な気温上昇の時期に起こる新感温病です。
- ・発症時（衛分証の段階）に発熱のほか咳嗽、咽喉痛、咽渴といった肺の病証を伴います。
- ・悪寒はあったとしても軽度で悪熱が併存します。
- ・発症時に中焦（脾胃）の証候はありません（もしあれば湿熱型温病を疑います）。

2) 暑温

夏季や長夏の暑邪の侵襲によって、発症時から足陽明胃経の病証を呈する新感温病です。暑邪は急速に津液と気を消耗して進行が速いので、衛分証の手太陰肺経の証候がほとんど現れないまま急速に陽明胃経の気分証や暑入心営に至ります。

弁証のポイント

- ・暑熱の環境下で発症します。
- ・咳嗽、咽喉痛など肺衛の証候がほとんど見られないまま、いきなり身熱、口渴、発汗、脈洪大といった陽明気分熱盛と、気津両傷による倦怠感が現れます。神昏譫語が現れれば暑邪が心包を蒙蔽したことを示します（夏の熱中症の意識障害の多くがこれにあたります）。

3) 秋燥

秋季の燥邪が肺衛を侵襲することによって発症する新感温病です。燥邪は津液を消耗するので、初期には肺を中心とした乾燥症状が現れます。陽明に伝変すると胃燥の口渴や腸燥便秘を来します。また秋燥は初秋のまだ気温が高い時季の**温燥**と、晩秋の気温が低くなってきた時季の**涼燥**に大別されます。

弁証のポイント

- ・発症初期から発熱、微悪寒、頭痛など衛分証の証候とともに、肺燥の証候すなわち乾性咳嗽、咽乾、鼻燥、舌少津といった証候が現れます。
- ・燥邪によって肺胃傷津となると衛分証の証候が去って、咽渴口渴や乾性咳嗽といった乾燥症状が目立ってきます。

4) 冬温

冬季において時節外れの高い気温や室温環境下（「非節之暖」）で風熱邪気の侵襲を受けて、手太陰肺経から発症する新感温病です。

弁証のポイント

- ・発症季節の違いだけで上述の風温と同様です。

5) 春温

春に発症するので春温という名称ですが、先立って冬季に寒邪の侵襲を受けておりこれが潜伏したまま化熱（陰陽転化）して裏熱傷陰の状態が潜在し、これが春天の陽気に誘発されたり（**伏邪自発**）あるいは新感に誘発されたり（**新感引発**）して**突然発症する伏邪温病**です。邪気はもともと裏にありますから基本的に衛分証がありません。ただし、新感引発の場合はその新感自体による衛分証が伏邪による気分証や営分証とオーバーラップして発症することがあります。発症時点ですでに病態が潜行しているため、急速に進行して営分証や血分証に至り重症化する可能性があります。

弁証のポイント

- ・春季に突然気分証（高熱、口渴、身熱など）や営分証（煩躁、神昏譫語など）で発症します。
- ・伏邪が陽明気分に潜伏していた場合には高熱、身熱、口渴、多汗（陽明経熱）や便秘、大便硬（陽明腑実、津液虧損）を呈します。伏邪が少陽気分に潜伏

していた場合にはそれらの症状は目立たず口苦や弦数脈（足少陽胆経の熱証候）を呈します。

6) 湿温（〈症例2〉参照）

日本では梅雨時～長夏～晩夏にかけて天熱地湿の環境下で、湿熱邪気の侵襲を受けることによって発症する新感温病です。湿は五行で土に属し、臓腑では脾胃と親和性が強いいため、発症初期の衛分証の段階から肺衛の証候に脾胃の証候が加わります。

弁証のポイント

- ・発症時から発熱、微悪寒、身痛など肺衛の証候に加えて、胃脘部痞悶や不快感、肢体困重などの脾胃の湿邪証候が併存します。
- ・発熱や身熱はしばしば午後に起こります。（湿温潮熱）
- ・舌診上は初期は白膩苔で、進行して熱が湿にまさると黄膩苔となります。

7) 伏暑

夏季に受けた暑邪が体内に潜伏し、秋季や冬季になって新感によって引発され突然発症する湿熱型の伏邪温病です。発症時から新感に伴う肺衛の証候に加えて、湿熱や傷陰の証候が併存します。暑邪は湿熱の性質を有し、津液を損耗しやすいからです。

弁証のポイント

- ・秋冬の新感（秋燥や風寒）の衛分証候（発熱、悪寒、頭痛など）を伴って突発し、湿熱証候（心窩部痞悶、膩苔など）や傷陰証候（心煩口渴、尿赤、紅舌少苔など）を呈します。

ステップ4 衛気営血弁証

病邪の類型を念頭に、衛気営血弁証をします。衛気営血は病位の浅深です。基本的に衛分から始まりますが、衛分証の期間は短く病邪によって数時間～数日です。春温、伏暑の新感引発伏邪や暑温のような新感では、急速に気分証や営分証への伝変が起こります。衛分証と気分証は病邪類型によって臨床症状や舌脈診所見に違いがありますが、概略は以下ようになります。

1) 衛分証 (〈症例1〉参照)

温病における表証です。体表に分布する衛気と温邪との邪正相争が発熱、頭痛、微悪寒、身体痛といった症状で現れます。典型的な症状所見を示しますが、必ずしもこれら所見が揃うとは限りません。

症状：発熱，微悪寒，口微渴，咳嗽

舌脈：舌尖紅，舌苔薄白～薄黄，脈浮数

2) 氣分証 (〈症例2〉参照)

温邪が衛分から一段深入して筋肉や臟腑に広く分布する血脈外の營氣に至ります（血脈中の營氣に侵入すると營分証となります）。臟腑では肺，胃，大腸，胆，三焦，脾などですが，下焦の肝・腎や上焦の心・心包には至りません。邪正相争が激しくなりますが，まだ正氣の衰えはないか軽度です。

症状：高熱，悪熱，口渴，発汗

舌脈：舌苔黄燥，脈洪大あるいは滑数

3) 營分証

温邪がさらに一段深入します。營分とは血中あるいは脈中の營氣のことで、血分証の一步手前といえます。血脈は心包と心に通じていますので、營分証では心神が邪熱に覆われて意識障害を呈します。邪正相争の病位は深いのですが、熱症候は氣分証よりむしろ目立たなくなり口渴など熱症状は外見上むしろ弱まりますが病状は深刻化しています。津液を焼灼し津液虧虚の証候も現れます。

症状：身熱夜甚（夜間に増強する身熱感），煩躁不眠，譫語

舌脈：舌質紅絳，苔少，脈細数

4) 血分証 (〈症例3〉参照)

温邪が脈中の血分にまで深入すると血熱証候が現れます。迫血妄行してさまざまな出血症状や深紅色の発疹が現れます。臟腑では心が擾乱されて神志が失調するため、意識障害や狂躁といった營分証の証候も併存することがあります。

症状：吐血，衄血（鼻出血），齒齦出血，便血など出血症状，深紅色発疹，神昏譫語，狂躁

舌脈：舌質深紅，脈細数

衛氣營血弁証と並行して三焦弁証を行います。温病学における三焦とは病位³の上下です。上焦、中焦、下焦の3つの部位です。臓腑でいえば上焦は肺と心包、中焦は脾胃と大腸、下焦は肝と腎が三焦弁証の関連臓腑です。三焦が病位の上下であるということは、衛氣營血が病位の浅深であることと対照的です。つまり温病の進行パターンを、浅から深へという方向性（衛氣營血弁証）と、上から下へという方向性（三焦弁証）の2つの物差しで評価しているわけです。ただし両者は完全に独立した物差しではなく、浅→深と上→下という方向性はある程度は連動しています。しかし、衛氣營血弁証で温邪の病位を弁じ、さらに三焦弁証で病変臓腑まで見定めることによって各臓腑に応じた適切な用薬や処方が可能となります。